



一般教育演習（フレッシュマンセミナー）グローバル・キャリア・デザイン1
第26回ファースト・ステップ・プログラム（FSP）アジア
全体報告書

2019/9/9~2019/9/21

Singapore & Vietnam



目次

目次-----	1
第 26 回 FSP アジア概要-----	2
ファースト・ステップ・プログラムとは？ FSP 研修中の主な活動-----	3
研修日程 参加費用について-----	4,5
参加メンバー紹介-----	6
班活動の概要-----	7
研修報告① 事前授業・準備活動・事後授業-----	8
研修報告② 企業・組織等訪問-----	12
JTB アジア・パシフィック本社 鷲塚智紀様によるご講話-----	13
Institute of Bioengineering and Nanotechnology	
木本路子様、杉井重紀様によるご講話-----	15
日本航空株式会社シンガポール支店土橋健太郎様、川口純子様によるご講話---	17
ヤンマーホールディングス株式会社 松原武夫様によるご講話-----	19
SANCOH VIETNAM CO., LTD. 高奥淳様によるご講話-----	21
独立行政法人国際協力機構（JICA）プロジェクトオフィス：	
地球規模問題対策科学技術協力事業（SATREPS） 中山隆二様によるご講話----	22
研修報告③ 大学訪問-----	24
Singapore Management University -----	25
National University of Singapore -----	27
Can Tho University -----	28
Vietnam National University HO CHI MINH CITY INTERNATIONAL UNIVERSITY-	29
研修報告④ その他訪問先、振り返りミーティング-----	30
クチトンネル（ベトナム）-----	31
水上マーケット（ベトナム）-----	33
戦争証跡博物館（ベトナム）-----	34
北海道大学サイゴン校友会エルム懇談会-----	35
振り返りミーティング：シンガポール-----	36
振り返りミーティング：ベトナム-----	37
研修報告⑤ 訪問国調査活動-----	38
訪問国調査活動：シンガポール-----	39
訪問国調査活動：ベトナム-----	40
研修報告⑥ 参加者の声-----	41
編集後記-----	43
謝辞-----	44



【上写真：帰国後の歴代の FSP 生との懇親会にて】

第 26 回 FSP アジア概要

ファースト・ステップ・プログラム (FSP) とは？

FSP 研修中での主な活動

研修日程

参加費用について

参加メンバー紹介

班活動の概要

第 26 回 FSP アジア概要

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？

北海道大学の海外研修プログラムの1つである「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」。全学部の1, 2年生を対象としており、初めて海外に行くまたは海外経験の少ない学生の参加を歓迎しています。

2週間程度の期間の中で、国際的に活躍する企業・組織や国際機関を訪れ、実際に働いている方々との対話や、現地の大学を訪れ、現地の学生との授業体験や学生交流など、多くの研修を行います。

グローバルな視野を広げつつ自分自身のキャリアについて考え、行動を起こす第一歩を踏み出すことを目的としています。

FSP 研修中の主な活動**企業・組織等訪問**

海外（ここではシンガポール、ベトナム）に進出している日本の企業や組織に訪問し、実際に海外で働く方々のご講話をいただき、仕事内容はもちろんのこと仕事に対する姿勢や「生きざま」を学びます。海外をビジネスの主戦場にされている方々から直接学びを得ることができる大変貴重な機会です。

大学訪問

現地の大学に訪問させていただき、英語による授業体験や学生交流をします。交流活動の中ではディスカッションやフリートークに加え、それぞれ大学や国について紹介するプレゼンテーションを行い、お互いの大学の魅力や文化について理解を深めます。

訪問国調査活動

各々興味のある分野について調査トピックを定め、現地での調査活動の計画を立てて実行します。調査活動は同じようなテーマを持った複数人で行います。今後の調査プロジェクトに携わる際の情報収集力や実行力のほか異言語でのコミュニケーション能力の向上を目標としています。

第26回 FSP アジア概要

研修日程

日数	日付	曜日	都市・地域	時刻	内容
1	9/9	月	札幌 東京	8:00 9:40	新千歳空港 発 (JL500) 東京国際空港 着 ※台風の影響で 11:30 発チャンギ国際空港 行きの便 (日本航空・JL037 便) は欠航
2	9/10	火	東京 マニラ シンガポール	1:15 4:50 9:55 13:40 17:00~	東京国際空港 発 (JL077) ニノイ・アキノ国際空港 着 ニノイ・アキノ国際空港 発 (PR507) チャンギ国際空港 着 JTB アジア・パシフィック本社 訪問
3	9/11	水	シンガポール	8:00~ 12:30~ 16:00~	訪問国調査活動 Singapore Management University(SMU) 訪問 訪問国調査活動
4	9/12	木	シンガポール	9:30~ 16:00~	National University of Singapore(NUS) 訪問 訪問国調査活動
5	9/13	金	シンガポール	9:00~ 14:00~ 18:00~	振り返りミーティング A*STAR : Institute of Bioengineering and Nanotechnology 訪問 訪問国調査活動
6	9/14	土	シンガポール ホーチミン	9:30~ 13:10 14:20 18:00~	日本航空株式会社 訪問(空港内) チャンギ国際空港 発 (VN650) タンソンニャット国際空港 着 北海道大学サイゴン校友会エルムの皆様と の懇談会
7	9/15	日	ホーチミン カントー	10:40~ 19:00	クチトンネル 見学 全員で夕食
8	9/16	月	カントー	6:00~ 9:00~	水上マーケット 見学 Can Tho University 訪問

第26回 FSP アジア概要

				18:00~	Can Tho University の学生や先生とともに 食事会
9	9/17	火	カントー	10:00~ 14:30~ 16:00~	ヤンマーホールディングス株式会社 訪問 (Can Tho University 内) SANCOH VIETNAM CO., LTD. 訪問 訪問国調査活動
10	9/18	水	ホーチミン	15:30~ 18:00~	戦争証跡博物館 見学 訪問国調査活動
11	9/19	木	ホーチミン	8:30~ 14:30~ 17:00~	Vietnam National University Ho Chi Minh City INTERNATIONAL University 訪問 独立行政法人国際協力機構 (JICA) プロジ ェクトオフィス 訪問 事業名：地球規模課題対応国際科学技術協 力事業 (SATREPS) 訪問国調査活動
12	9/20	金	ホーチミン	8:30~ 13:00~	振り返りミーティング 訪問国調査活動
13	9/21	土	ホーチミン 東京 札幌	8:00 16:00 18:45 20:30	タンソンニャット国際空港 発 (JL750) 成田国際空港 着 成田国際空港 発 (JL3049) 新千歳空港 着

(時刻は全て現地時間による)

参加費用について

参加費用：22万円程度 【費用に含まれるもの】航空運賃、宿泊費、車両借り上げ代等

奨学金：日本学生支援機構 (JASSO) 奨学金 (10万円)、ニトリ奨学金 (5万円) が支給される可能性あり。(受給要件を満たす学生は、JASSO とニトリ奨学金の受給・併給)

第26回 FSP アジア概要



【上写真：1日目の朝、新千歳空港にて】

参加メンバー紹介

第26回 FSP アジアに参加したメンバーは20名です。メンバーの半分である10名はこれまでに海外渡航経験がなく文字通りのファースト・ステップとなりました。

前列左から

総合理系1年	上野 裕太	《総》
法学部1年	最知 俊介	《記》
法学部2年	今井 好朔	《プ》
法学部1年	渡部 真人	《総》
総合理系1年	辰巳 祥平	《リ・総》
総合理系1年	佐藤 優名	《記》
法学部1年	伴野 有里	《プ》
理学部1年	梶原 若奈	《総》
理学部2年	荒浪 円	《企》
工学部2年	曾我 明日香	《企》

後列左から

法学部1年	高橋 竜大	《プ》
文学部2年	山本 悠生	《記》
工学部1年	角田 亮平	《総》
総合理系1年	田渕 健太朗	《記》
文学部2年	岩谷 まどか	《記》
工学部2年	両国 千夏	《企》
経済学部1年	久保田 詩乃	《企》
医学部1年	黒田 花音	《記》
理学部2年	荒井 彩花	《記》
理学部1年	栗原 恭子	《サブ・総》

引率教職員

北海道大学	国際連携機構	川端 千鶴
北海道大学	客員教授	井上 修平
北海道大学	国際交流課	中島 百恵

班名称の略称について

《リ》→《リーダー》
 《サブ》→《サブリーダー》
 《総》→《総務班》
 《企》→《企業訪問班》
 《プ》→《プレゼンテーション班》
 《記》→《記録広報班》

第 26 回 FSP アジア概要

班活動の概要

FSP では海外研修をより実りのあるものにするために、メンバーを4つの班に振り分けて仕事を分担して活動しました。以下に仕事内容を記します。

《リーダー》《サブリーダー》

プログラム全体及び総務企画班のまとめ役を担います。教職員の補佐的役割を果たし、各班長との連携・協力や団体行動の規律管理を中心に円滑な活動の手助けをします。その他、FSP 卒業生との交流会の企画・運営を行います。

《総務企画班》

企業・組織や学校訪問時の名札づくり等 FSP の運営をサポートします。また、研修前のランチ会や学習会、研修中の学生交流イベント等の企画・運営、研修中の訪問教育機関までの移動経路の確認を行います。研修後は訪問教育機関へのお礼状を作成します。

《企業訪問班》

研修前の訪問企業・組織についての学習会資料の作成やお土産購入、研修中の訪問企業・組織での挨拶等の対応や訪問する際の移動経路の確認の他、研修後のお礼状の作成を行います。

《プレゼンテーション班》

北海道や札幌、北大留学に関する情報や北大に留学している学生へのインタビューから得た情報をもとに、現地学生に北大の魅力を伝えるため、訪問教育機関で英語によるプレゼンテーションを行います。

《記録広報班》

FSP に関わる活動の記録やその PR を行います。Facebook を通しての訪問国に関する情報や研修の振り返りの発信、帰国報告会でのプレゼンテーション、本報告書の作成等を行います。



「北海道大学 ファースト・ステップ・プログラム」

Facebook アカウント : @1stepprogram

<https://www.facebook.com/1stepprogram/>



研修報告① 事前授業・準備活動・事後授業

第1回事前授業：6月26日（水）

第2回事前授業：7月03日（水）

第3回事前授業：7月10日（水）

第4回事前授業：7月17日（水）

第5回事前授業：7月24日（水）

学習会：9月05日（木）

ランチ会（第1/2/3回）：7月03日/17日/24日（水）



【上写真：ホーチミン市のホーチミン人民委員会庁舎（ベトナム）】

研修報告① 事前授業・準備活動・事後授業

第1回

FSP に関わってくださる先生方のご紹介に加え、FSP の概要や、FSP 参加学生として目指すべき姿勢などについて学びました。また、メールのマナーや話を聞くときの態度など、普通の大学の講義では教わることができない社会人としての常識を改めて確認する良い機会となりました。さらに FSP 参加学生は、この講義が初めて全員での顔合わせとなったため、各々緊張しながらも自己紹介などを行っていました。



【上写真：自己紹介を行う FSP 参加者】

第2回

授業課題と成績評価の説明、役割分担を行いました。FSP の授業課題には、海外研修前と海外研修後に行う「目標達成自己評価シート」というものがあり、研修を通してどのような自分になりたいのか、目標達成のための具体的な行動、それらの反省などについて記入します。これを行うことで、明確な目標設定だけでなく、自分の取り組みを振り返ることができ、次の活動に生かすことができました。また、各班のメンバーが決まりました。

第3回

FSP の目的の1つであるキャリア・デザインについて、ワークシートを用いて考えました。「将来、何をしたいか」から考え、今の自分が目標達成のために取り組むべきことなどをグループワークで共有しました。グループワークを行うことで、さまざまな人の意見を聞くことができ非常に興味深かったです。

第4回

海外での危機管理と安全管理について学習しました。危機・安全管理のワークシートの答え合わせを行った後、各々が渡航先で役立つと感じた情報を全員で共有し、理解を深めました。さらに体調管理などの具体的な事例について、危機事象の発生の防止や対処法などを話し合い、危機・安全管理の重要性を再認識する機会となりました。

第5回

「良い聴衆」、「効果的なフィードバック」について考えた後、プレゼンテーション班によるプレゼンを聞き、それぞれが感じたことをフィードバックしました。この取り組みには、プレゼンの改善はもちろんのこと、チームの力である「相互補完する協力関係、相乗効果」などのトレーニングも含まれていました。また、お越しいただいた歴代の FSP の先輩方からも貴重なアドバイスを頂き、より効果的なフィードバックを行うことができました。それと同時に、このプログラムの先輩方との繋がりを感じる機会にもなりました。

研修報告① 事前授業・準備活動・事後授業

学習会

9月5日(木)に総務企画班主導のもと行った学習会は、訪問させていただく大学と企業や組織についての情報や訪問国の歴史などを全体で共有するために企画、実施されました。たくさんの情報を共有することができ、非常に有意義な時間になりました。

訪問大学の歴史、特徴について、シンガポールマネジメント大学(SMU)では、BOSS制と呼ばれる履修登録方法があり、オークションにより履修者を決めるという制度や、カントー大学(CTU)ではトロピカルセメスターという、英語か仏語で熱帯地域について学ぶプログラムがあるということなどを共有しました。

訪問企業・組織様については、企業で行われている研究や、公的機関が行っていること、さらにご講話者様についてなど、訪問先に関わる興味深い情報を提供していただき、研修への期待が高まりました。

ベトナム戦争についての情報共有も行い理解を深めることができたため、実際に戦争証跡博物館でより深い学びを得ることができました。(文責：佐藤)



【上写真：学習会での様子】

ランチ会

FSPでは現地研修の前にメンバー間の仲を深めるために、昼休みに3回のランチ会が開催されました。

第1回、第2回のランチ会は第26回FSP生同士で開催し、最初に緊張をほぐすために自己紹介ゲームなどのアイスブレイクを行った後に自由に歓談する時間を設けました。FSPでは現地研修前から研修後までメンバー間で協力して取り組まなければいけない場面が多く、それを乗り越えるためには、メンバー間の「ヨコの繋がり」を強化することは不可欠でした。実際に研修ではメンバー間で団結して実りあるFSP研修にすることができたため、このランチ会は大成功だったと思います。

第3回のランチ会は第26回FSP生に加え、歴代のFSP生の方々も参加しました。このランチ会は代々のFSP生の間での交流を深め、「タテの繋がり」を強くするために開かれました。初めて先輩方と話をする第26回FSP生も多かったですが、先輩方から将来のキャリアデザインのお話から現地での生活で役立つ持ち物のアドバイスまでもいただき、有意義な時間にすることができました。先輩方はとても優しく協力的だったため、この食事会の後も連絡を取ってくださり、様々な場面で尽力してくださいました。

今回のFSPで得ることができた「タテとヨコの繋がり」を大切にしてそれぞれの道へと進んでいきたいです。(文責：山本)

事後授業

第1回事後授業

※第1回事後授業は本報告書30ページ記載の「振り返りミーティング：ベトナム」と同じ内容であるため、このページでは具体的な記述は割愛させていただきます。

第2回事後授業

今回の授業は現地研修後初の授業であり、久しぶりにFSP生や先生方と再会することができました。この授業では主に2つの活動を行いました。

1つは第3回事前授業のときに記入したキャリアデザインに関するワークシートを見直して、研修前と研修後でキャリアデザインに関してどのような変化があったかを発見し、他のFSP生とお互いの気づきを共有することです。

筆者の個人的なキャリアデザインの変化として挙げられるのは、将来の夢ややりたいものを柔軟に考えられるようになったことです。以前の自分は交通運輸に高い関心があったため、その業界に関わることができる仕事に就きたいと考えていました。しかし、研修を通して、社会や物事を局所的に見るのではなくもっと大局的な視野をもって観察しなければ物事の本質は見えてこないことを学び、その考えを改めることにしました。というのも交通業界にしか興味を持たない人間

がその業界に携わる会社に勤めていたとしても、その会社が実社会の様々な部分と密接に関わり合っていることに理解が及ばず、本当に会社にとって役に立つ仕事はできないからです。

もう1つの活動は、記録広報班による帰国報告会にむけたプレゼンテーションのリハーサルです。なかなか工程表通りにプレゼンの製作が進まないなかでのリハーサルというのもあって、かなり手厳しいフィードバックを数多くいただきました。しかし、ただ厳しいだけでなく記録広報班を何とか助けてやろうという想いが伝わってくるものばかりで、何としてもよいプレゼンに仕上げようという決意が固まりました。

さらに過去のFSP生の方々もこのリハーサルを見に来てくださり、大変有意義なフィードバックをいただきました。川端先生にも大変ご多忙の中様々なフィードバックをいただいております、本当にたくさんの方々の支援をいただいているのだと実感しました。このような方々の期待を裏切らないような素晴らしい帰国報告会を開催するために、第26回FSP生全員一致団結してラストスパートをかけていきたいです。(文責：山本)

研修報告② 企業・組織等訪問

JTB アジア・パシフィック本社:9月10日(火)

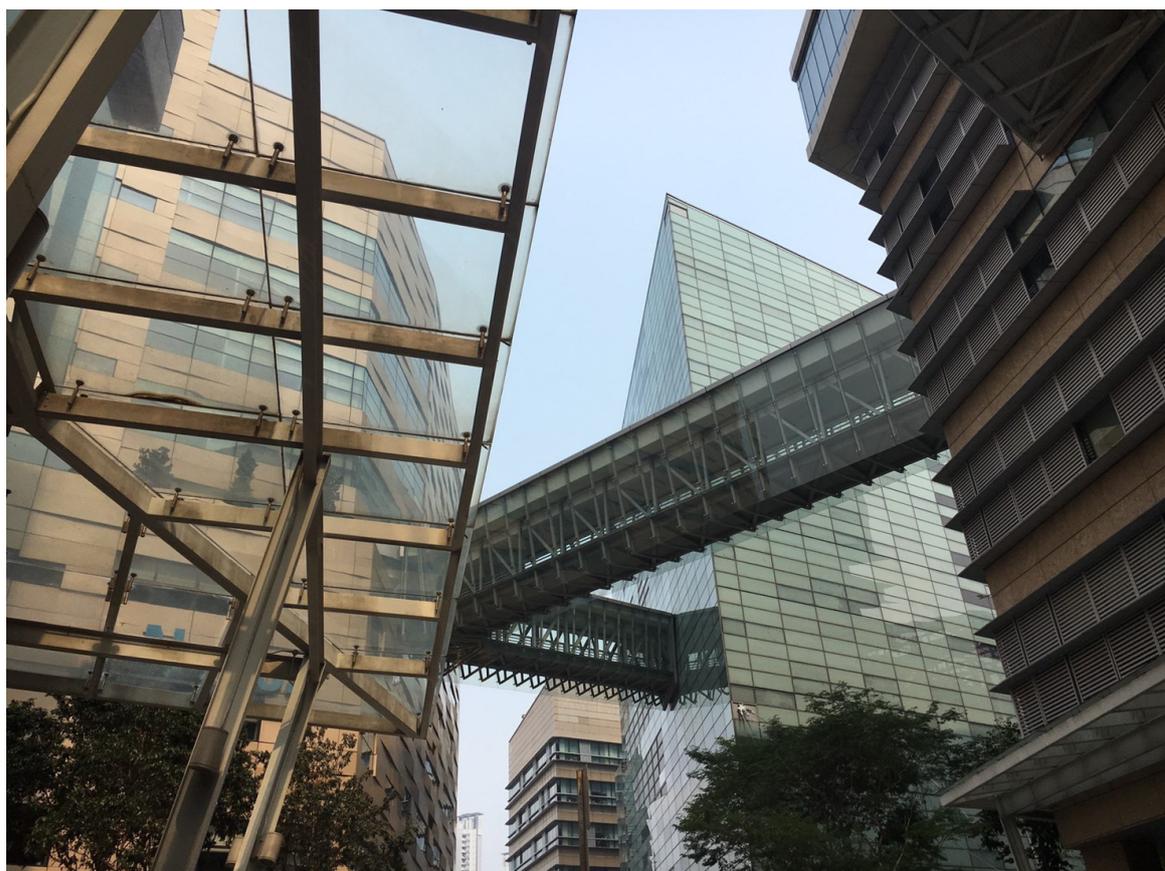
Institute of Bioengineering and Nanotechnology:9月13日(金)

日本航空株式会社シンガポール支店:9月14日(土)

ヤンマーホールディングス株式会社:9月17日(火)

SANCOH VIETNAM CO., LTD.:9月17日(火)

独立行政法人国際協力機構 (JICA) プロジェクトオフィス:9月19日(木)



【上写真：バイオメディカル分野の研究開発拠点、バイオポリス（シンガポール）】

JTB アジア・パシフィック本社 鷺塚智紀様によるご講話

9月10日(火)にシンガポールにてJTBアジア・パシフィック本社を訪問し、鷺塚智紀様にご講話をいただきました。JTB Corporation.様(以下JTB様)は旅行業で日本最大かつ世界有数の事業規模を有する企業です。最初に、「鷺塚様ご自身の仕事への取り組み方」についてお話しくださいました。



【上写真：ご講話の様子】

鷺塚様は大学時代に将来のことをあまり考えずにJTB様に入社したそうです。入社後も数年は学生気分が抜けず、なんとなく仕事をして漫然と日々を過ごされていました。楽しくない仕事をするために会社に行き、上司に仕事で怒られて家に帰る日々の生活に嫌気がさし、当時は自身の存在価値が分からなかったそうです。

そんな生活に転機が訪れたのは入社3年目のことでした。鷺塚様が担当していたお客様のアメリカ旅行に添乗員として付きそうになったのです。そのお客様は鷺塚様を毛嫌いしていた方でした。途方に暮れた鷺塚様は出発1週間前から上司と相談し、その中で上司に言われた「相手が嫌がるまで徹底的にサービスをやり続けてこい」という言葉にすがるって頑張ることを決めました。それから1週間はスキのない完璧なサービスを提供できるように死に物狂いで働いたそうです。完璧なサービスのためには物事を先回りして考える必要があります、常に頭を動かし続けました。

結果、アメリカの旅行は大成功に終わり、旅行の最終日にはそのお客様にお食事に誘われるまでに信頼を勝ち取ることができました。さらに社内の人からもその仕事ぶりを褒められ、人の役に立つことの充実感を覚えたそうです。そしてその日から仕事がとても楽しいものを感じられるようになったそうです。

この時に鷺塚様は二つのことに気が付いたそうです。一つ目は「諦めなければ結果は必ずついてくること」、二つ目は「死に物狂いで働くことが『仕事をする』ということ、自分はお金をもらっている「プロ」なんだから」ということです。

今回のご講話を通して、自分たちも社会人としての心構えを強く胸に刻み込むことができました。自分たちも社会人になったときに、それぞれの道の「プロ」としてやりがいを感じながら仕事ができる人生を歩んでいきたいです。(文責：山本)

研修報告② 企業・組織等訪問



【上写真：鷺塚様と FSP 生一行】

Institute of Bioengineering and Nanotechnology 木本路子様、杉井重紀様によるご講話

9月13日（金）にシンガポールで Institute of Bioengineering and Nanotechnology（以下 IBN）を訪問し、木本路子様、杉井重紀様にご講話していただきました。最初にお話をしてくださった木本様は、当初講話予定だった平尾一郎所長の代理として、主に IBN やその上部組織であるシンガポール科学技術研究庁（以下 A*STAR ）、平尾研究室での木本様ご自身の研究についてお話をしてくださいました。A*STAR は日本でいうところの理化学研究所のような総合研究機関であり、IBN は A*STAR の下部組織で主にバイオ工学に関わる研究をしています。現在平尾研究室が進めている研究は生物の DNA の塩基対に人工の新たな疎水性の相補的な塩基を2つ、対として付け足すことで遺伝情報を拡張させ、DNA 自体に新たな性質を与えるというものであり、人工核酸抗体（アプタマー）によるデング熱の診断薬の開発につながっているそうです。

次にお話をしてくださった杉井様は、主に海外留学の利点、杉井様ご自身の研究、研究者としての心構えについてのお話をしてくださいました。杉井様ご自身も日本の大学をご卒業されたのちに渡米し、アメリカの大学で博士の学位を取得されたキャリアをお持ちの方です。杉井様は、海外留学の利点は「英語力」「サバイバル力」「人脈の広げ方」が身につくことだとおっしゃっていました。杉井様が現在進められている研究は皮下脂肪組織の分子細胞生物学についてです。皮下脂肪組織に含まれる脂肪由来幹細胞は多様な分化能や生理活性を有することが明らかになっていて、これらの細胞機能のしくみを分子的に解明し、再生医療に利用しようというのが杉井様の研究の概略になります。

ご講話ののちにラボツアーを開催していただき、実際に研究所に入らせていただきました。廊下は不規則に曲がっていて、部屋の仕切りはすべてガラス張りで明かりが入ってきやすい構造になっていました。実験室には様々な実験機器が所狭しと並んでいて、テーブルの上には実験の記録を記したノートが置いてあり、実験の現場の空気感を肌で感じることができました。今回のご講話はバイオ工学の分野でトップクラスの研究者のお二方でしたが、研究者ならではの視点からたくさんのお話をいただきました。今回の FSP の仲間の中には研究者を目指している人もいて、その人は特に刺激を受けた様子でした。また、理系文系問わず、探究者としての「生き方」の話は大いに参考になりました。（文責：山



【上写真：杉井様によるご講話の様子】

研修報告② 企業・組織等訪問

本)



【上写真：杉井様、木本様と FSP 生一行】

日本航空株式会社シンガポール支店 土橋健太郎様、川口純子様によるご講話

9月14日（土）にシンガポールのチャンギ国際空港内にある日本航空株式会社シンガポール支店様（以下 JAL シンガポール支店）オフィスを訪問し、土橋健太郎様、川口純子様にご講話をいただきました。JAL シンガポール支店はアジア中心に世界中に7か所ある客室乗務員基地を持つ支店の一つです。本研修では当初搭乗予定だった東京発シンガポール行きの飛行機が台風の影響により欠航したため、マニラ経由の便でシンガポール入りしましたが、その飛行機の手配の際には日本航空株式会社様（以下 JAL 様）の札幌、東京、マニラやシンガポールの各拠点の皆様にご多大なるご尽力をいただきました。

土橋様は勤続30年のなかで JAL 様の様々な部門を渡り歩き、シンガポール支店長として赴任する直前は世界中の航空会社との提携構築や、日本政府と諸外国との間で開催される航空交渉に携わる業務を行っていました。JAL 様には10年後にありたい姿「グランドデザイン」という目標を立て、それに向けて段階的にすべきことは何かを考えるというプロセスがあります。これは企業にとってだけでなく、私たちの日常生活にも通じる非常に大切な考えだと感じました。また、グローバル化が進展する中で日本だけでなく、海外にも目を向けていかなければならないと教えてくださいました。さらに、海外で働く際は、働く国の文化的背景や、歴史、日本との関係に関する知識を身につけ、その国にお邪魔させていただくという姿勢で臨むことが大事だというアドバイスもいただき、自分も将来留学や仕事で海外に行く際には、その気持ちを忘れないようにしようと思いました。土橋様の仕事への野心的な姿勢は、ビジネスマンのあるべき姿として見習うべきものがありました。



【上写真：質疑応答の様子】

川口様は長い間国際線のキャビンアテンダントとしてお勤めされており、現在はシンガポール基地のキャビンアテンダントのマネジメント業務に携わっていらっしゃいます。川口様は日本でお勤めされていたころから、海外に関わる仕事を目指し、努力を続けておられたというお話を聞き、自分のやりたいことを諦めずに努力を継続することの大切さを学びました。また、相手と信頼関係を築くためには、たとえ言語の壁はあっても、「誠実・真摯・素直」な気持ちでコミュニケーションをとると良い、というお言葉をいただき、大切なのは言語ではなく心であることを実感しました

お二方のご講話はとても密度の濃いものであり、質疑応答の際には予定時間を過ぎてし

研修報告② 企業・組織等訪問

もうほど多くの質問が出ました。お二方はご多忙にもかかわらず、ご講話後も私たちを保安検査場の手前まで案内してくださったり、荷物を運ぶのを手伝ってくださったりと、おもてなしの精神を大切にされていることが伝わってきました。今回のご講話でいただいたお言葉を忘れずに自分の夢に向かって邁進していきたいです。(文責：田湊)



【上写真：土橋様、川口様と FSP 生一行】

ヤンマーホールディングス株式会社 松原武夫様のご講話

9月17日（火）の午前中に、ベトナムのカントー市でヤンマーホールディングス株式会社様（以下ヤンマー様）を訪問し、松原武夫様にご講話をいただきました。ヤンマー様は、日本の大阪に本社を構え、エンジン並びに農機、建機、小型船舶を製造しているメーカー会社です。「美しき世界は感謝の心から」という信念のもと、会社の強みを生かした再生可能エネルギーや、地域のエネルギー循環、農・漁業のアップグレードなど、さまざまな社会貢献を行っています。

ご講話してくださった松原様は大学時代に海外の大学との交流プログラムに参加され、実際にインドネシアを訪れたそうです。その際に日本のような先進国とインドネシアのような新興国には統計の数字だけでは理解することができない生活水準の格差が存在することを目の当たりにして、新興国の発展に尽力する決意を固められました。

ご講話の中で特に印象に残った内容は、日本とは異なるベトナムでの農業事情や、それを考慮した上で社会貢献の一環として海外での支援を行う際

には、現地声をくみ取ることが重要であること、そして海外で支援を行うときには金銭的な支援をするだけでなく、しっかりと相手国の事情を調べて現地人がどのような問題を抱えているのかを把握してから取り組まなければならないということです。現地人の声を実際に聞くことは、より良い支援につながるとともに、相手を尊重している姿勢であると感じました。

また、ご講話の後にはヤンマー様の倉庫にある農業機械を実際に見学させていただきました。ベトナムのメコンデルタでは日本とは異なり三期作を行っているため、日本ブランドの農業機械であっても田植え機では日本と植え幅が異なるなど、現地の稲作方法に適用できるように作られていることを実感しました。上記にもあるように、現地の状況や方法の違いに合わせて支援を行うことが、相手国への配慮のある支援になるのではないかと感じました。このような相手国への配慮や順応するための心構えは、海外だけではなく、価値観の異なる人と人との関係を築いていく際にも大切になってくるのではないかと思います。

（文責：荒井）



【上写真：カントー大学内のヤンマー様の農業トラクター倉庫】

研修報告② 企業・組織等訪問



【上写真：松原様との集合写真・カントー大学にて】

SANCOH VIETNAM CO., LTD. 高奥淳様のご講話

9月17日(火)の午後は、ベトナムのカントー市で SANCOH VIETNAM CO., LTD. 様 (以下サンコーベトナム様) を訪問し、高奥淳様にご講話していただきました。サンコーベトナム様は、札幌市に本社を置く株式会社サンコー様(以下サンコー様)によって2012年9月に設立された現地法人です。サンコー様は、イメージファイリング、GIS など情報処理を行う総合商社であり、サンコーベトナム様は、海外でのそのような地図のデータ加工の拠点となっています。



【上写真：質疑応答の様子】

高奥様のご講話の中で、海外でキャリアを積む際には英語ができることだけに注視するのではなく、「自分のミッションは何かを考えて行動する」という言葉が印象的でした。今までは、海外で働くには英語力が最重要であると考えていましたが、英語だけでなく自分の専門を生かしたキャリア形成をしたいと考える良いきっかけになりました。

また、海外で働くからこそ意識することとして、「郷に入っては郷に従え」という高奥様の意識に感銘を受けました。海外で働くというのは、日本国内で働くよりも言語や価値観などのさまざまな障壁があるように思われますが、海外と日本の共通点も少なからずあるので神経質になる必要はないのだと考えられるようになりました。



【上写真：高奥様と FSP 生一行】

さらに、ご講話の後にはオフィスの見学をさせていただきました。サンコーベトナム様のオフィスでは、1枚も紙を使用せずにパソコンのみで作業を行っており、日本よりも効率的に仕事を行っている印象を持ちました。

また高奥様は日本語でコミュニケーションを取れるベトナム人の副社長のことを非常に信頼しており、良い人材との出会いというのは、自分の意思を上手く伝えながら海外で働くことの手助けをしてくれることを学びました。(文責：荒井)

独立行政法人国際協力機構（JICA）プロジェクトオフィス：地球規模問題対策 科学技術協力事業（SATREPS） 中山隆二様のご講話

9月19日（木）の午後は、ホーチミンのJICAプロジェクトオフィスを訪問し、中山隆二様にご講話をいただきました。中山様の担当するプロジェクトは「高効率燃料電池と再生バイオガスを融合させた地域内エネルギー循環システムの構築」です。このプロジェクトは「地域にあったエネルギー循環システムを作ってベトナムの発展を支えること」が目的です。エネルギー循環システムのモデルとしてはエビ養殖場のモデルがあります。これはエビ養殖において排出された残渣と汚泥からバイオガスを作り出し、それを燃料とした燃料電池で発電し、養殖に必要な電気を効率的に生み出す、というものです。中山様は「重要なのは現地の方々が容易に、そして継続的に電力を得られるような装置とシステムを考えること」とおっしゃっていました。



【上写真：質疑応答の様子】

プロジェクトの内容以外にもベトナムで働く上で困難に感じたことやベトナムに対する思いをお話してくださいました。困難に感じたこととして、ベトナム人と日本人の締め切り時間に対する考え方が違うことを挙げられていました。ベトナム人の時間感覚は日本人にとってはルーズに感じてしまうことも多々あり、仕事をする上でそのままでは困るのでそれをいかに伝えるかというところで苦労なさったそうです。ベトナムに対しては、中山様は東京よりもベトナムの方がずっと暮らしやすい、本当にベトナムは良い場所だ、とおっしゃっていました。私も働く場所に対して愛情を持って働く人間になりたいと思いました。

ご講話の後の質疑応答の時間では中山様のお仕事に関することからベトナムでおススメのお土産について等大変多くの質問が出ました。私が「人を助ける上で大切にすべきことは何か」という質問をしたところ、「まず人間関係を構築すること。そしてこちらの持っている技術を押し付けるのではなく『日本ではこうしているよ』と紹介ようにすること」だと答えてくださいました。国際協力というどうしても先進国が支援される国に対して自国の技術や習慣等を持ち込むイメージが強かったので中山様のお話を聞いて国際協力に対する考え方が少し柔らかくなったと同時に人助けとは何かを考えさせられました。

研修報告② 企業・組織等訪問

(文責：黒田)



【上写真：オフィス玄関にて中山様とともに集合写真】

研修報告③ 大学訪問

Singapore Management University
(シンガポールマネジメント大学) : 2019年9月11日 (水)

National University of Singapore
(シンガポール国立大学) : 2019年9月12日 (木)

Cam Tho University
(カントー大学・ベトナム) : 2019年9月16日 (月)

Vietnam National University-Ho Chi Minh INTERNATIONAL University
(ベトナム国家大学・ホーチミン校) : 2019年9月19日 (木)



【上写真 National University of Singapore での学生交流の様子】

Singapore Management University

9月11日（水）、Singapore Management University（以下 SMU）を訪問させていただきました。SMU は本学の協定校の1つで、シンガポールの中心部に位置しており、会計学、経営学、経済学、情報システム学、法学、社会科学の6学部から構成されています。ここでは、Japanese Culture Club（通称 JCC）の生徒と交流を行いました。

私たちは SMU の JCC の学生と一緒に弁当をいただき、1時間ほど歓談をしました。JCC の生徒であったため日本に興味のある生徒たちが多くいました。私が話した JCC の学生さんは部活で剣道をしており、東南アジアとはいえ日本の競技がシンガポールの部活に存在することに驚くとともに、日本文化が受け入れられていることを実感しました。また、英語でのコミュニケーションに苦戦する場面もありましたが、他の言い回しを考えたり、ボディランゲージを活用したりして相手に伝える努力を行う良い練習になりました。英語である分、日本語で伝えようとするよりも困難でしたが、しっかり自分の頭で考えて伝える努力をしたため、より身になる経験になりました。現地の学生さんも真剣に話を聞こうとくださり、非常に良い雰囲気での交流することができてとても感謝しています。



【上写真：SMU 生との交流の様子】

昼食後、SMU 生が用意してくださった簡単なゲームを行いました。ゲームの内容は、交流会にいた学生全員にチョコレートが配られ、名前を呼ばれた生徒はチョコレートの色によって決められた質問に答えるというものでした。今回名前を呼ばれたのは、本学と SMU の学生合わせて3人ほどでしたが、お互いの事をより知ることができる良いきっかけになったと思います。

また最後の自由時間では、現地の学生は私たちよりも学ぶことに対して貪欲であったため、外国語を習得する際の勉強法や独学で勉強する際の悩みを聞き、今後の勉強に活かすことのできる学びを得ることができました。さらに、現地の学生の学びに対して貪欲な姿勢を見て、海外の人と渡り合っていくにはまだまだ自分は学びが浅いことを痛感しました。このような経験ができたのは、FSP だからこそだと思います。（文責：佐藤）

研修報告③ 大学訪問



【上写真：SMU 生と FSP 生の集合写真】

National University of Singapore

9月12日(木)、National University of Singapore(以下NUS)を訪問させていただきました。シンガポール国立大学は2019年現在、アジア大学ランキング1位*の大学です。今回は学生交流与授業参加をさせていただきました。(*英国誌、『タイムズ・ハイヤー・エデュケーション(Times Higher Education)』より)



【上写真:NUS生と共に授業を受けている様子】

NUSではまずお互いの大学についてのプレゼンテーションを行った後、交流活動として折り紙と英語でのなぞなどを行いました。NUS生の中にはすでに鶴を折れる人もいて大変驚きました。一方私たちはシンガポールの伝統的な遊びについて無知であったので、交流する相手国について貪欲に学ぶ姿勢の重要性を痛感しました。

その後はNUSのChris McMorran先生の「日本文化の捉え方の差異」についての授業を受けさせていただきました。授業はすべて英語で行われましたが、予習課題と隣に座ってくれたNUS生の手助けのおかげで、ある程度理解することができました。日本の授業と比べて学生の発言が多く、先生もその発言をもとに授業を進めていて、日本との授業スタイルの違いを実感しました。また、授業内で「Famous」な日本文化は何か考える時に、歌舞伎や茶道のような伝統的日本文化ではなく、漫画・アニメのような日本のポップカルチャーが「Famous」であるという考えを多くのNUS生が持っていて、日本文化に対する意識の差を感じました。僕はこれまで、日本文化に最も精通しているのは日本人であると何も疑わずに考えていましたが、それは盲点であると痛感しました。というのも日本人が日本文化を客観的に評価しようとしても、日本人の目から見る日本文化は日常生活に通ずる部分が多すぎるために困難であるからです。むしろ日本の生活や文化に一切の文脈を持たない外国の方のほうが、日本文化自体を俯瞰して観察できるため、客観的評価が可能になるからです。もちろん日本文化に対する絶対的に正しい理解は存在しませんが、様々な視点から切り取られた日本文化像を統合する中で、より深みのある理解につながるのではないかと感じました。(文責：田淵)



【上写真：NUSでの講義の様子】

Can Tho University

9月16日（月）に、Can Tho University（以下CTU）を訪問させていただきました。CTUは本学の協定校の1つです。

今回の訪問では私たちはまず、CTUの学生と一緒にCTUの先生が我々のために用意してくださった特別授業を受けました。授業の説明によると、ベトナムでは養殖が盛んであり、CTUではベトナムが世界シェアの95パーセントを占める食用ナマズの養殖の研究を行っているそうです。また授業をしてくださった先生は、2,3人のFSP生の専攻を例に挙げながら、工学や法学のような多くの学問が水産とつながっていることを教えてくださいました。一見関連性がないと思われる学問であっても、すべての学問は繋がっているという学びを得たため、自分の専門外の学問にも視野を広げていきたいと思いました。



【上写真：学内の養殖場の見学の様子】

その後、キャンパス内の海老や牡蠣などの養殖場を説明を受けながら見学させていただきました。初めて実際に養殖場を見たため、教科書では分からない養殖の様子を見ることができました。また、養殖場の見学の後には、CTUの学生とともに昼食をいただきました。昼食後、本来予定されていた野外活動がスコールにより中止になったため、屋内でプレゼンテーションを行いました。

その後、チームに分かれて北大側が企画したテーマトークを行い、ベトナムの季節や水上マーケット、交渉術などについて話しました。とりわけ交渉術に関しては、水上マーケットがあるベトナムだからこそ聞くことができ、非常に興味深かったです。

夕食会

プログラム後に以前本学で博士号を取得された副学長のLa Viet Dzung様が私たちを夕食に招待してくださり、メコン川のエビなどでもてなしていただきました。夕食会ではヤンマーホールディングスの松原様も参加されました。私は現地の学生さんと将来の進路について話しました。自分は将来へのイメージが漠然であるのに対し、現地の学生さんは将来親の会社を継ぐつもりであることなど、具体的な将来像を描いていたので、将来への意識の差を感じました。（文責：佐藤）



【上写真：夕食会の集合写真】

Vietnam National University Ho Chi Minh City INTERNATIONAL UNIVERSITY

9月19日（木）、ベトナム国家大学ホーチミン市校国際大学（以下IU）を訪問させていただきました。IUは本学の協定校の1つであり、ベトナムで初めて英語を主要言語として教育・研究を行ってきた大学です。（HP参照 <https://hcmiu.edu.vn/en/>）

IUに到着してすぐに1年生と2年生に分かれ、別々の授業に参加させていただきました。1年生は「データをいかに情報にするか」、「活用する場面から見た情報の種類」についての講義を受け、3回のディスカッションがありました。2年生は「経営者としてすべきことは何か」といった内容の講義でした。1年生の授業で「データを情報にする」ためにすべきことについて他の学生と話し合った際、図を使用しつつお互



【上写真：本学学生によるプレゼンの様子】

いの意見について不明点を質問したり、良いところを褒め合ったりして充実した話し合いができました。データと情報について新たな知識を得られたとともに英語での活発な意見交換ができて大変刺激的な経験となりました。その後は少人数のグループに分かれてキャンパスを案内していただきました。IUの学生からは日本語について「〇〇ちゃんや〇〇君の『ちゃん』や『君』ってどういう意味？」など聞かれるとドキッとするような質問を投げかけられました。答えるのは難しい質問でしたが、相手に興味を持ってもらえている、と感じて嬉しく思いました。私も訪問前に音声聴いて練習したベトナム語での自己紹介をするとIUの学生も喜んでくれてとても盛り上がり、改めて異文化交流において相手の文化を知ろうとすることの重要性を感じました。キャンパスツアーの中でカフェテリアの他に図書室に案内してもらいました。驚いたのは英語教育のために図書室の本が全て英語で書か



【上写真：IU生とFSP生一行】

れていたことです。私もこのような厳しくも充実した環境で勉強してみたいと思いました。研修も終盤にさしかかると、多くのメンバーが積極的に話せているように感じました。4回の大学訪問で海外の学生とコミュニケーションをとることに大きな壁を感じなくなっていくように思います。（文責：黒田）

研修報告④ その他訪問先・振り返りミーティング

クチトンネル（ベトナム・ホーチミン市、クチ県）：2019年9月15日（日）

水上マーケット（ベトナム・カントー市）：2019年9月16日（月）

戦争証跡博物館（ベトナム・ホーチミン市）：2019年9月18日（水）

北海道大学サイゴン校友会エルムの懇談会

（ベトナム・ホーチミン市）：2019年9月14日（土）

振り返りミーティング：シンガポール：2019年9月13日（金）

振り返りミーティング：ベトナム：2019年9月20日（金）



【上写真：カントー市を流れるメコン川と朝焼け（ベトナム）】

ベトナム：クチトンネル

9月15日、我々はクチ県のクチトンネルを見学しました。クチトンネルとはベトナム戦争時、アメリカ軍に対抗する南ベトナム解放民族戦線によって作られた地下トンネルです。約25年の歳月をかけて全長250kmにも及んだ手掘りのトンネルは、ベトナム戦争当時アメリカは最後まで陥落させることができず、「鉄の三角地帯」とも呼ばれるようになりました。戦車や空爆によるアメリカの攻撃から身を守りゲリラ部隊の反撃に役立ったこのトンネルは、当時の生活の様子や戦争中に使われた罠の数々と共に戦争史跡公園となって保存されています。我々以外の日本人の他にも、ドイツや中国など様々な国から見学者が訪れていました。塹壕の説明を現地ガイドの方から伺います。上から穴を覗き込むと真っ暗で底が見えないほどで、その深さに驚くとともに用いられた爆弾の規模や衝撃が連想させられました。終戦から時間が経過した現在、穴の中はコブラやサソリの住処となっているそうで立ち入りは禁止されています。この塹壕が使われていないという事実が、現在のベトナム



が平和だということを象徴しているように思われました。トンネルの周囲は生い茂った緑に囲まれています。ベトナム戦争時、ゲリラに手をこまねいたアメリカ軍はゲリラの本拠地であるジャングルに枯葉剤を大量に散布し、木々を枯死させました。その結果写真のようにベトナムの森には未だに太い木がありません。現在まで続いているベトナム戦争の痕跡をまじまじ

【上写真：鬱蒼としたジャングルを歩く FSP 生一行】と体感することができました。

30m ほどのクチトンネルの内部に実際に入ってみました。体をかがめ中腰でないと歩けないほどの窮屈さに驚愕しましたが、これでも観光客向けにトンネルを拡大したのだと聞かされ、当時の人々の不便な暮らしに思い起こされます。この他にも、アメリカの武器を鹵獲して対戦車地雷などに作り変えている人々の模型や、空爆の目標となるのを防ぐため煙突が離れて位置するかまどを備えた当時の家などの展示物がありました。展示の説明には「全ての人がアメリカと戦う戦士だった」や、クチが「アメリカの侵略」に対し巨大な罠となった、などとありベトナム側の視点からの説明が



【上写真：トンネル内部の様子】

載っていました。ベトナム戦争について学ぼうとするとつい米軍など資本主義側の視点から見てしまいがちになってしまうので、普段とは別視点で戦争を見つめることのできた今

回の経験は現地で学ぶことの貴重さを実感することができました。(文責：最知)

水上マーケット

9月16日（月）、朝6時に集合し、ホテルからバスで10分ほどの船着場へ行って水上マーケットを見学しました。朝6時という早い時間にたくさんのお店が開いており、日本とベトナムの生活の違いを感じることができました。

航行中は様々な船とすれ違いました。我々の様に外国人を乗せた観光目的の船もあれば、農作物や魚を売るために我々の船に横づけ



【上写真：果物を売るために近づいてきた船】

てくる船など、多くの船が行き交っていました。水上マーケットの商売船は2つに分類することができ、1つは比較的小さな船で多種類の果物や野菜、料理を売る小売船、もう1つは比較的大きな船で、1種類のものを大量に積んで売っている卸売船です。商売船では、長い棒に取り扱っている食材を順々に串刺しにして頭上に掲げることによって、客にその船で売られているものを示しています。メコン川沿岸ではこのような形態の水上マーケットが多々見受けられ、その土地の環境に根ざした市場の在り方があるのだと感じました。また、航路の途中では道路標識のようなものをいくつか見かけました。日本とは異なり、ベトナムでは船が移動手段の一つになっていることも実感しました。



【上写真：様々な食材を売っている商売船】

水上マーケット見学後、我々は上陸して川辺の陸上マーケットを見学しました。マーケットに入るや否や、様々な強烈なおいを混ぜたような刺激臭がしました。そんな市場の中を通っていくと、絞められて間もない鶏やカエル、皮を剥がされたネズミ等、現代の日本ではなかなか見ることのない物が売られていました。日本とベトナムの文化の違いを感じるとともに、ベトナムの市場のありのままの姿を見ることができたと思います。（文責：佐藤）

ベトナム：戦争証跡博物館

9月18日(水)、ホーチミン市の戦争証跡博物館を訪問しました。この博物館では屋外に戦闘機や戦車が、屋内に年表や写真が展示されていました。あいにくの雨で屋外展示はほとんど見ることはできませんでした。館内は3階建となっており、上から回る順路に設定されていて日本の博物館とは違うそのシステムに少し驚きました。最初の展示は歴史年表と戦争に使われた物資や兵力のデータで、年表は第二次世界大戦終結後日本統治下から脱却し、ホー・チ・ミン氏がベトナム独立宣言を公表するところからスタートし、ベトナム戦争が収束するまでベトナムはどのように戦ったのかが克明に記されていました。また展示に付いているQRコードを読み込むことで、日本語の他にフランス語、韓国語、ロシア語に翻訳することができ、ベトナム戦争に歴史的関係の深い国々からの観光客が多いからこそその配慮が行われているのかと考えました。

Bảng trích phòng Những sự thất lịch sử 18

- Xe tăng, xe bọc thép Tank, armored vehicles	2.074
- Máy bay các loại Aircraft of all types	1.800 <small>(Số máy bay bay trên không) (Number of aircraft)</small>
- Pháo các loại Artillery weapons	1.532
- Xe cơ giới Mechanized vehicles	56.000
- Vũ khí bộ binh các loại	1.900.000

日本語で読む説明のウェブサイト

種類	数量
1 戦車、装甲車(台)	2
2 各種航空機(機)	1,800(600機)
3 各種砲(挺)	1,532
4 自動車(台)	56,000
5 各種歩兵武器	1,900,000
6 コンピューター	120,000

2階部分に降りると戦時中や戦後のベトナムの様子を写した写真が展示されていました。その中でもとりわけ目を引いたのが、1970年から30年以上にもわたってベトナム戦争に用いられた枯葉剤の悲劇取材してきた日本人カメラマン、中村悟郎さんの枯葉剤の悲惨さを克明に記録した写真でした。戦争当時、様々な知恵や技術を使って襲撃してくるゲリラたちに頭を悩ませていたアメリカはゲリラたちの活動拠点となっているジャングルを消滅させようと、ダイオキシンの高濃度で含まれていたAgent Orangeという枯葉剤を連日のように散布しました。第1級の発がん物質のダイオキシンは地上にいた400万人あまりのベトナム人を蝕みました。枯葉剤の害は遺伝し、今日のベトナム人にも先天性欠損やがん、障害といった形でその爪痕を残しています。吐き気を覚えるほどの凄惨な写真も展示されていました。



が、「戦争」を考える上でのリアルなイメージを得ることができました。

時間の都合上、筆者は3階と2階の一部しか見ることはできませんでしたが、教科書の写真ではない実物の展示を見ることで、ベトナムの泥沼化した戦争の凄惨さを体験することができたと思います。ベトナムの現在にも続く悲惨な状況を繰り返し生み出さないためにも、今一度自分の歴史認識を鍛え直すことが大事だと感じさせられました。(文責：最知)

北海道大学サイゴン校友会エルム懇談会

9月14日(土)、ベトナム・ホーチミンに到着後、すぐに北海道大学サイゴン校友会エルムの方々が懇談会を開いてくださいました。校友会エルムとは在学生・教職員・卒業生などのすべての本学関係者が集い、会員の成長を図り、本学を世界水準の大学にする支援をするという目的でできた会です。その中でサイゴン校友会の方々は、本学の海外研修プログラムの一環である国際インターンシップなどでも本学学生に懇談会を開いていただく支部です。

最初は、春巻き、パクチーサラダなどのベトナム料理をいただきながらサイゴン校友会の方々とお話をさせていただきました。その後、FSP生一人一人が全体に向かって自己紹介をして、将来の夢などを発表しました。サイゴン校友会の方々からも自己紹介をいただき、校友会の方々の仕事内容等を知ると同時に、海外で研究者になりたいという夢を持ったり、実は自分と同じ学問に興味を持ったりしているメンバーの夢も聞くことができ、人それぞれ夢に向かって動いていると分かり刺激になりました。

そして皆様の自己紹介をお聞きしたうえで、生徒がお話を伺いたい方のところへそれぞれ移動し、食事会を再開しました。さまざまな世代・仕事の方々にお話を聞くことができました。どの方も日本を出て海外で働いているということで、それぞれの経験談や海外で働くということへの考え方などを聞くことができ、とてもいい経験になりました。

私がお話させていただいたのは、本学工学部土木工学科を約40年前に卒業された菅原春様です。菅原様が社会人になられた頃は、今のように海外での仕事が当たり前ではない時代であり、その頃から約20年間も海外で主に鉄道敷設に関わる仕事されていたそうです。その方は、『「NO」というのは簡単だけど「YES」と言っていたほうが人生楽しいよ』とおっしゃっていました。このいただいた言葉を大切にしていきたいと思いました。(文責：田淵)



【上写真：校友会の皆様と FSP 生一行】

振り返りミーティング シンガポール

9月13日(金)、シンガポール滞在の最終日に、研修の一環として、これまでの自分の行動を見つめ直す「振り返りミーティング」を行い、これまでの日程の学びを全員で共有しました。お題は「1日目から5日目までの各自の気づき」でした。各自の気づきについてグループに分かれて意見を共有した後、グループで報告を発表しました。いくつかの意見を紹介します。

- ・シンガポールは日本よりもインフラストラクチャーが充実している。日本よりも発展していると感じた。
- ・シンガポールは過去、日本に侵略されたという歴史があり、訪問国調査活動でナショナルギャラリーなどに行くことにより、そのことがかなり意識されていることに気付いたが、反対に、日本の歴史教育ではあまり言及されていないと思った。
- ・(初めての学生交流を通して)とにかく、話しかけることが大切。感情を大げさに出すとコミュニケーションしやすかった。
- ・北海道大学を代表する人間として認識されていることに気付いたほうがよいと思った。そのことがらに自分が直接関わっている人間だ、という「当事者意識」の大切さを感じた。

グループ内で意見を出し合い、まとめてから感想を発表することで、1人分の感じ方や考え方ではなく、より広い視野を持つことができました。大学生になってから、このように真剣に自分や他人の思ったことを話し合い、検討する場というものに身を置くことがなかった



ので、新鮮に映りました。このような時間を持つと、過去行ったケアレスミスを反省だけでなく、将来の自分にとっても有意義であると思いました。海外というある種特殊な状況で行うだけでなく、日本でも、例えば日記をつけるなどして、継続していきたいです。(文責：岩谷)

【上写真：振り返りミーティングの様子】

振り返りミーティング ベトナム

9月20日（金）、ベトナム滞在の最終日に、包括してこれまでの学びを全員で共有しました。各自の気づきをグループで共有した後、1人ずつ全体に対してFSPで学んだことについて2分間のスピーチを行いました。特に印象的だったものについて紹介します。

- ・北海道大学を紹介するプレゼンテーションを作成する役割を果たすために、話し合いを重ねる中で、「人との対話」を意識するようになった。相手側の反論を踏まえた上で、自分の意見を相手に受け止めてもらえる方法について考えるようになった。
- ・学校がつまらないと感じていたが、それは大学に入学するという目標を達成して努力することがなくなっていたからだということに気付いた。
- ・今まで集団行動をすることが得意ではなかったが、今回FSPを通じて誰かに任せきりにするのではなく自ら動くという「当事者意識」を持つことの大切さがわかった。
- ・日常生活で、進路や自分自身の問題について考えることから逃げていた。今まで時間を無駄に使うことも多かったが、言い訳を自分から探していたことに気付いた。これからは継続しようと思う。

それぞれ歩んできた人生によって、みな同じプログラムを受けていても、このように、例えば日々の生活の反省から、コミュニケーションについてなど、学びに良い意味での「差」があることに気付きました。また、自分の意見だけでなく他の人の意見を聞くことによって、自分では発見できなかったような新たな視点からの気づきを得ることができました。（文責：岩谷）



【上写真：各自の気づきを真剣に考える FSP 生】

研修報告⑤ 訪問国調査活動

シンガポール訪問国調査：2019年9月10日～9月13日

ベトナム訪問国調査：2019年9月15日～9月21日



【上写真：シンガポール国立博物館】

訪問国調査活動 シンガポール

私の班は、リトル・インディアにあるスリ・ヴィラマカリアマン寺院の、ツーリズムとしての寺院のあり方について調査活動を行いました。そもそもリトル・インディアとはインド系のシンガポール人の居住地域のことであり、その歴史は19世紀、イギリスの植民地支配を受けていたシンガポールに、同じくイギリスの植民地だったインドから大量のインド人が労働力としてポートキー周辺に移り住んだことから始まります。実際に現地を歩いてみるとインド料理の香辛料や食材を扱う店、衣料品店が集まっているのに気づき、シンガポールにありながらまるでインドに来たかのような異国感が味わえました。スリ・ヴィラマカリアマン寺院はインド移民2世に信仰されるヒンドゥー教寺院の1つであり、戦いの女神カーリーを祭っています。実際に見てみると非常に派手な外観をしていながらも、内部は様々な神様が偶像としてまつられており非常に厳かな雰囲気でした。実際に1日4回「プシャ」と呼ばれるお祈りの儀式が僧侶達によって行われているそうです。現在は観光地化され多くの観光客が訪れる一方、信仰が根強く残り厳かな雰囲気を維持している様子は、ツーリズムの中の寺院の在り方としては模範解答のよう感じました。



【上写真：スリ・ヴィラマカリアマン寺院】

本研修全体を通して、シンガポール人は外国人に対して親切で、寛容だという印象を受けましたが、それは日々違う民族と接することが当たり前になっているからということもあるかもしれません。

対して、日本の民族構成は私たち日本人が98.1%を占めています。そのような環境で育った私にとって、グローバル化というものは遠いものでした。しかし、今回、調査活動を通しシンガポールの空気を吸うことによって、FSP以前よりも「グローバル化によって、すぐ隣に日本人でない民族がいること」をよりに生身のものとして感じ、思い描くことができるようになりました。(文責：岩谷)



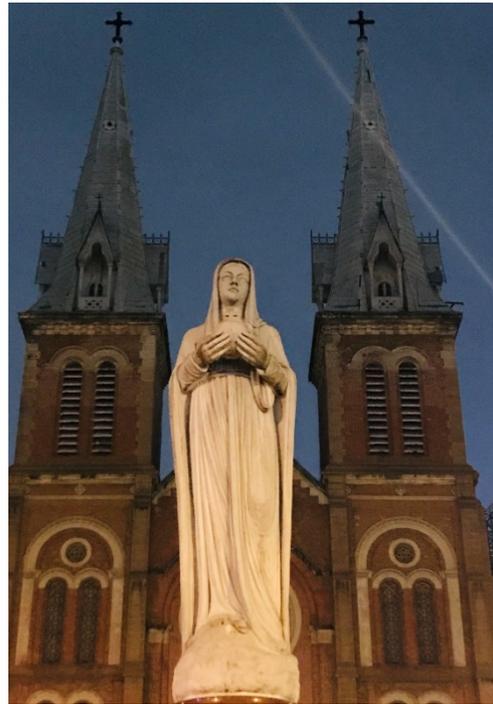
【上写真：夜のリトル・インディア】

訪問国調査活動 ベトナム

私の班では、最終日ベントン市場と、チャイナタウンであるチョロン周辺という2つの離れたエリアを訪問し、チャイナタウンとその他の街の違いを調査しました。本研修に参加するにあたってお世話になった方々にお土産を買うために、様々なショッピング・スポットや有名なカフェに行きました。その調査活動で感じたのは、「基礎的な商業システムはどこでも共通している」ということです。

今回のFSPに行く前、私は周囲の人から「海外初体験でベトナムはハードルが高い」と言われ、心配もされていました。私自身リサーチをする中で、ベトナムは比較的治安が悪いと聞いたこともあり、何か犯罪に巻き込まれたかどうか、など不安に思うこともありました。

しかし本やテレビを通して見るのではなく実際に行ってみると、当たり前ですがそこは魔境でも何でもなく、私たちと同じ、血の通った人間が住んでいることに改めて気が付きました。そして、どこでも同じように交通の便のよいところでは商業が発達していることや、言葉が通じなくても、売り手であるベトナムの人と、買い手である私たちはお互いたどたどしい英語など使うことで、通貨と商品を交換する商取引がスムーズでなくても



【上写真：夜のサイゴン大教会】

行えることを体感し、「売買行為は世界中どこでも普遍なのだ」と思いました。たとえ言語や文化やバックグラウンドが日本と全く違うところでも、原料を生産する、工場で加工する、問屋が卸す、小売店で売り、私たちは働いてそれを買うというような、「生きるための人間の営み」というものだけは絶対に共通しているのだと感じました。



【上写真：夜の市民劇場】

そして、全世界共通のビジネスというものの強さを改めて認識し、日本に帰ったらこのことを踏まえながら、グローバルな経済のあり方について詳しく調べてみようと思いました。今まで経済に興味がなかった私ですが、今回の研修を通して「国際的な商業活動」というものに強く関心を持つようになりました。(文責:岩谷)

研修報告⑥ 参加者の声

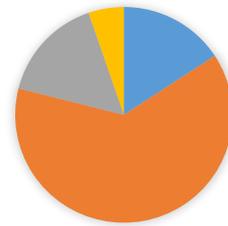
我々記録広報班は、今回の FSP を通してメンバーの心境にどんな変化が起こったのかを記録するために独自にアンケートを行いました。アンケートは帰国後すぐに行い質問に対して4択の選択肢から回答を選んでもらい、さらに理由も答えてもらっています。以下に示すアンケートの回答はまさに FSP での現地研修後の生の声でもあるので是非ご覧ください。

①今回の研修を通してどの程度コミュニケーション能力が向上しましたか？（英語力、プレゼンテーション能力、会話力、人の話を聞いて質問できる能力など）

・英語を話さなければと気負っていたが「伝わればいい」といい意味で吹っ切れたと思う。また、質問も気になったら聞くというスタンスが出来上がったと感じている。

・外国の方とたくさん話し、英語が伝わらない時に対処する仕方を試行錯誤できたから。

・海外留学中の諸活動を経験し、訪問先大学の受け入れ担当の大学生のみならず食堂でただ隣に座っただけの学生にも喋りかけ話せるようになったため。



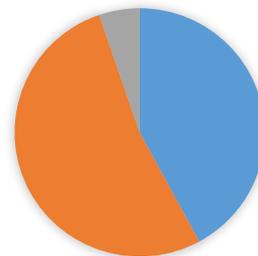
飛躍的に向上した：3人
 それなりに向上した：12人
 多少は向上した：3人
 向上しなかった：1人

②今回の研修を通してどの程度異文化理解能力が向上しましたか？（異なる文化・習慣の社会や人に対する理解力や適応力など）

・異なる文化を理解する上で、その国の歴史背景なども考慮すると、さらに理解が深まると感じた。

・現地在学生の話からなどだけでなく、様々な異文化を肌で感じることができ、今後の外国人との接し方などのビジョンを曖昧ながらも掴むことができたから。

・現地の空気を肌で感じることで、例えばベトナムの人の生活が少しでも向上するように、これからはベトナム製品を好んで買おうと思った。そういう風に、フェアトレードに対する理解や、他にも今まで関心なかった事柄について興味を持ち、積極的に関わっていいこうという気持ちになった。



飛躍的に向上した：8人
 それなりに向上した：10人
 多少は向上した：1人
 全く向上しなかった：0人

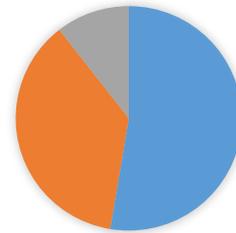
研修報告⑥ 参加者の声

③グローバルに視野を広げることはできましたか？(日本と訪問国との繋がりや、他の国について関心を持つなど)

・日本と訪問国との関係の深さは、特に戦争博物館などの見学で感じた。今まで詳しくは知らなかったベトナムの戦争の歴史や、日本がどのように関わっていたのかを知ることができたため、他国に関する関心を高めるとともに、日本と訪問国との繋がりを感じることができた。

・海外を特別なものと思わず、「グローバル」への考え方がすこし楽なものになったから。

・他国の方と交流することで、やはり将来は国際的に活躍したいと思うことができた為。また、他国の政治、宗教的背景を学ぶことの大切さを痛感したため。



飛躍的に視野を広げることができた：10人

それなりに広げることができた：7人

多少は広げることができた：2人

広げることができなかった：0

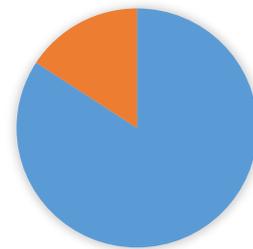
④FSP（ファースト・ステップ・プログラム）に参加する価値はあると考えますか？

・まず、自分が普段置かれている環境の外に出てみることにより、今まで知らなかったことを実体験を通して知ることができる。

企業訪問では、一流の企業人の話を生で聴くことができ、「働く」ということが、どれほどやりがいがあり厳しいものなのかを感じることができる。

・自分とは異なる多様な思考、生き方を学ぶことができ、今の自分が何者か、これからの自分がどうありたいか真剣に考えるヒントが得られるプログラムだと思うから。

・海外大学と海外企業の複数に行けるプログラムの性質はグローバルな進学や就職を考える上で非常に良いビジョンを与えてくれた。また引率してくれた先生自ら体現していた人と人との繋がりやの貴重さを学ぶことができた。FSPは自分の意識改革を大いに起こしてくれたため、このプログラムに参加していなかったら、今後の大学生活をこれまで通り浪費していたのではないかと思った。



大いにある：16人

ある：3人

どちらかと言えばある：0人

どちらかと言えばない：0人

ない：0人

編集後記

わたしは今回 FSP に参加して、自分と考え方・価値観が異なる人たちの意見を聞く機会が多かったので、非常に有意義なプログラムであったと思います。海外の学生はもちろん、FSP の参加学生間でも積極的に意見交換をする場があり、異なる価値観を受け入れて認め合う大切さを学びました。また企業、組織等訪問では、一流のビジネスマンや研究者の方からお話を伺うという貴重な体験をさせていただき、海外だけでなく、日本で働く際にも通じる大切な心構えを聞くことができました。この報告書では、多くの人の意見が取り入れられているので、それぞれの視点からのプログラムの魅力がみなさんに伝われば幸いです。(荒井 彩花)

FSP に参加したということは、今後の大学生活をより豊かなものにするために、重要であったと思います。私の中でもっとも印象に残っていることは、実は、訪問国調査活動や海外の学生と交流することなど、「海外ならではの」経験したことそのものではなく、企業の方や本研修の引率者の川端・井上先生からご講話をいただいたことです。「今後どう生きたいか」「そのためには何をすればいいか」という、生き方についての重要な示唆を受けたと感じています。この報告書を作成するためにオフィシャルな文章を書くことも、有意義な経験になりました。みなさんもぜひ FSP に参加して、自分を改めて見つめ直してみて下さい。そのためにこの報告書がお役に立てるなら幸いです。(岩谷 まどか)

私が FSP への参加を決めた動機は、海外で働くことについて学び将来の選択肢を広げるためでした。以前の私は海外でキャリアを積むことに興味がなかったのですが、実際に研修を通して一番感じたことは「海外で働く方はかっこいい」ということです。研修中に様々な企業、組織等を訪問させていただいた際に、どの方も自身の仕事について誇らしげに語っていらっしゃるのを見て理屈抜きに憧れを抱きました。そしてなぜ憧れを持ったのかを明らかにする作業が、まさにこの全体報告書作成でした。自分にとって全体報告書は FSP の完璧なフィードバックになっていると自負しています。(山本 悠生)

私は FSP に参加して生き方の幅、そして自分の可能性が広がったと感じています。約 2 週間の研修でなにか力をつけるのは難しいかもしれませんが、研修中に得た学びは確実に私の中に自分の能力を伸ばす「種」を蒔いてくれたように思います。この報告書を班員と一緒に書いているうちに「種」も少し成長しました。決して楽な作業ではありませんでしたが、班員と一つのものを作り上げるために奮闘する時間は本当に充実していて楽しかったです。このような貴重な機会をいただけたことに感謝します。(黒田 花音)



【上写真：ベトナム・カントーの陸上マーケット】

謝辞

今回の研修で私たちが貴重な体験をするとともに多くの学びを得ることができたのはお忙しい中、私たちのために時間を割いてご講話くださった企業・組織の皆様、温かく私たちを受け入れてくださった訪問大学の皆様をはじめ、本プログラムにかかわるすべての皆様の手厚いサポートのおかげです。心より感謝いたします。

また、研修中私たちを導いてくださった引率の国際連携機構・川端千鶴さん、井上修平先生、事前・事後授業を通してサポート・ご指導くださった高等教育推進機構・荒井克俊先生、肖蘭先生、本学国際交流課・中島百恵さん、田中郁子さん、五十嵐麻美さんには今一度感謝申し上げます。

最後に、約2週間行動を共にし、支え合って一緒に成長したメンバー全員に感謝します。

本当にありがとうございました。

【表紙上写真：IBN 様でのご講話を聞き入る FSP 生一行、下写真：NUS にて】

一般教養科目（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン1
第26回 FSP アジア 全体報告書：2019年10月30日

編集

第26回 FSP アジア 記録広報班

田淵健太郎 荒井彩花 岩谷まどか

黒田花音 最知俊介 佐藤優名 山本悠生

お問い合わせ先

北海道大学 国際連携機構 国際オフィサー室/学務部国際交流課

電話：(011) 706-8032/8042

Email: ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Website: http://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/

Facebook: <https://ja-jp.facebook.com/1ststepprogram/>